

2040に向けたサービス提供体制のあり方検討会ヒアリング資料

障害福祉分野における 人材確保の現状
生産性向上の取組事例
人口減少地域における取組事例



公益財団法人

日本知的障害者福祉協会

会長 樋口 幸雄

社会福祉法人京都ライフサポート協会

給与等

令和6年度一般職員平均年収500万円以上
令和5年5%ベースUP 更に令和6年2.7%UP

役職者男女比 = 5 : 5 (2024年実績)

初任給 293,750円～ (生活支援員, 社会福祉士の場合)

20年間の平均離職率3.1%

環境

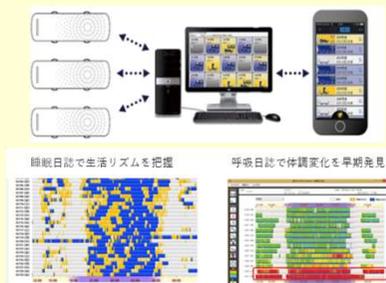
誇りを持てる施設環境

- ・強度行動障害激しい物壊しに対し随時修繕を実施し美しい環境を維持
- ・財源確保課題



ICT導入

生産性向上・業務省力化
支援記録データクラウド管理、
夜勤業務の軽減、インカム連携、
介護リフト etc..導入実績



人材

利用者と働く喜びを共感できる人員配置
⇒ 中・高年者の雇用
公益財団法人産業雇用センターとの連携
⇒ 一般企業退職者の積極的な正規採用

採用実績：元パイロット、元大手電機メーカー職員、元通販大手役員etc..生活支援の現場での活躍多数

職員にとって、
働きやすい

職場。利用者にとって、
安心して暮らせる居場所

- 清潔、臭いのしない環境
～できれば綺麗な施設
- 役割のある活動
～社会とつながる仕事
- できるだけ高工賃
～ほしい物が買える賃金

樋口幸雄 (Higuchi Yukio)

公益財団法人日本知的障害者福祉協会会長
社会福祉法人京都ライフサポート協会理事長

1983 (昭和58) 年京都府下で初のグループホームを開設運営(未制度時代含む)。障害者支援施設の施設長を経て、2001年社会福祉法人京都ライフサポート協会設立。5～6名単位の小規模、分棟型のユニット、職住分離を実現する『横手通り43番地「庵」』(障害者支援施設)の開設・運営。



wakuraku

暮らす

安心できる暮らしの場
-自立していると本人が自覚できる場



人口減少地域での事例(島根県)

【法人本部のある浜田市の状況】

島根県西部に位置

- ・人口 約48,000人(R7.3月)
- ・高齢化率 38.83%(R7.3月)

人口は、1955年(昭和30年)の約91,000人をピークに、以降ずっと減少(70年で約43,000人減)している。

⇒人口減・高齢化は、全国平均の先を行っている

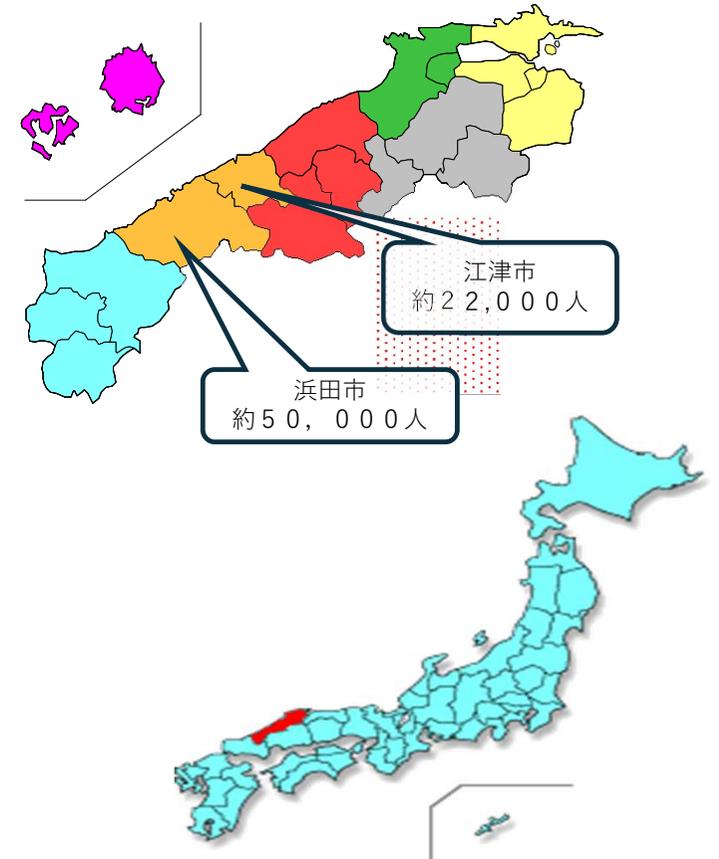
【社会福祉法人いわみ福祉会】

1973年 手をつなぐ親の会を母体に設立

各種障がい福祉サービス、高齢福祉サービスを提供

設立当時より、障がい者が地域で普通に暮らし、普通に働く社会の実現を目指した。

それには、土台となる地域自体が豊かである必要があり、必然的に「福祉を核にしたまちづくり」や「地域の必要性に応える」ことに力を入れた。



事例①

高齢者サロン「ひだまりふっくら」の取組み

前述のような地域事情もあり、市街地であってもまちに元気がなかったため、平成17年から障害者グループホーム建物の1階部分を元気で活動的な高齢者グループに解放し、誰でも立ち寄れる共生社会の拠点づくりの一環としてサロン運営を支援した。

そこで、元気な高齢者は、それぞれ培ってこられた知見をもとに、健康マージャン、俳句会、絵手紙教室、認知症家族会、軽体操の会、小旅行の会などの活動を活発に行い、自ら生きがいを感じながら、地域の賑わい創出にも貢献している。

また、サロンでは、障がい者が清掃や来訪者対応などに取り組むことで、働く場の提供にもつなげた。



事例②

伝統産業の継承(石見神楽産業)の取組み

島根県西部には、日本神話などを題材した伝統芸能「石見神楽」があり、子どもから高齢者まで広く愛されている。演舞団体も県内に約130団体あり、地域のお祭りや祝い事には欠かせない存在だ。2019年には、日本遺産にも登録され、世界に誇れる大きな財産となっている。

しかし、この神楽を舞うのに必要な「衣装」「面」「道具」は、古くから地元の事業者の手作業によって演舞団体に供給されてきたが、高齢化や人口減少による後継者不足等の状況にあり、納品まで数年待ちなど供給が追いつかない課題を抱えていた。

そこで、これら神楽道具の製作は、構造化等により「障害のある方の生涯にわたる仕事にできるのではないか」と考え、教を請い、長い年月をかけ技術の研鑽を重ね、就労継続支援事業の作業種として確立していった。

近年においては、神楽以外にも類似事例として、ご縁をいただいた大正時代から続く地元和菓子店の技術継承にも取り組んだ。





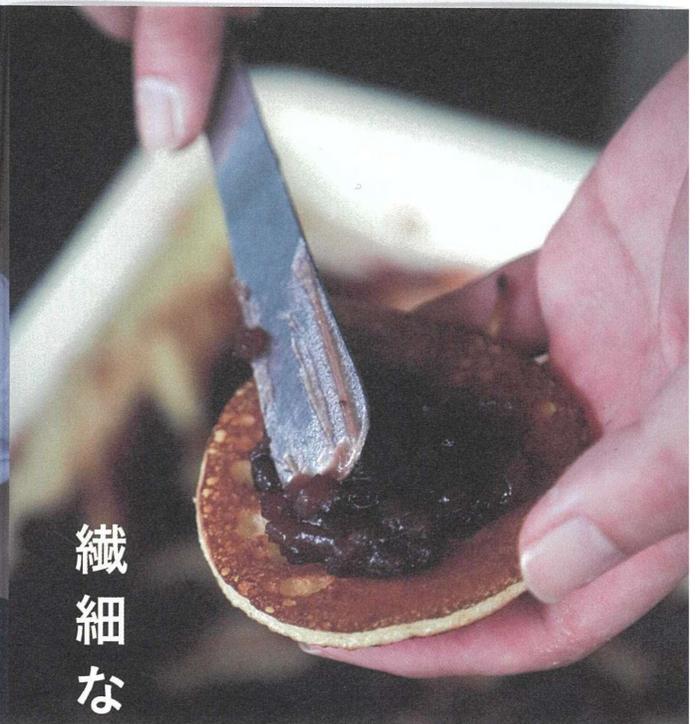
小さな試み。

完璧などら焼きを焼くためには、鉄板の火加減が重要です。その火加減を確かめるために、まず小さな生地で試し焼きを行います。この「小さな試み」があつてこそ、多くの生地を一度に焼くことができます。この工程は、まるで未来の大きな成果を見据えた一歩のようにも感じられます。



見守る温かさ。

どら焼きの生地を一枚一枚丁寧に焼く姿をじっと見つめる師匠。その厳しい眼差しには、完璧な焼き加減を求めるだけでなく、私の成長を見守る温かさを感じます。人を育てることは、失敗しても、試行錯誤を繰り返す姿を根気強く見守り、時には適切な助言を与える。その過程は、師匠が一枚一枚の生地に込める思いと同じように感じます。



繊細な心遣い。

師匠から受け継がれた技術と精神。粉の配合から餡子の仕込み、そして生地を焼くまでの全ての過程に、細やかな気配りと忍耐が必要でした。伝統を受け継ぐことは、ただ技術を受け継ぐことではなく、一つひとつの工程に込められた思いを理解し、繊細な心遣いをも身につけることでした。